様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月　 ８ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２９３６

研究課題名（和文）アメリカ史における大西洋史の新史料に基づく実証的研究

研究課題名（英文）A Demonstrative Study on Atlantic History Based on New Historical Documents in American History

研究代表者
和田　光弘（Wada, Mitsuhiro）

名古屋大学・人文学研究科・教授

研究者番号：１０２２０９６４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、近年、米英の歴史学界において急速に支持を拡大している最新のアプローチ、大西洋史の有用性を新史料に基づき実証するとともに、かかる共同研究を通じて、東海地区の主要国公立大学３校のアメリカ史研究者間のネットワークを構築しようとするものである。研究代表者・研究分担者・ 研究協力者はそれぞれが担当するテーマのもと、当該アプローチを援用しつつ、すでに独自に米国の市井より入手して私蔵している未刊行手稿史料のオリジナルなど、一次史料の読み込みと分析をおこない、大西洋史の実証的な深化を試みた。

研究成果の概要（英文）：In this joint research project, the project members utilized the perspective of Atlantic history, which recently attracted the eyes of historians of western history in the world, and established the research network among the National and Prefectural Universities in the Tokai area. Each member has his or her own research project, examined and analyzed unpublished manuscript documents, some of which are privately-owned by members. In doing so, we tried to substantiate the validity of the Atlantic historical approach.

研究分野：アメリカ史

キーワード：アメリカ史　大西洋史　アメリカ植民地時代　海事史　オネイダ運河　南北戦争

１．研究開始当初の背景

（１）グローバル化が進む昨今、アメリカ史研究においても、海や国境を越えるヒト・モノ・カネ・情報等の研究が重視されるに至っている。大西洋を囲む 4 大陸の相互連関を考究対象とする大西洋史（アトランティック・ヒストリー）は、まさにその動向の頂点にあり、いわゆるグローバル・ヒストリーとの親和性も強い。大西洋史の全貌は、その来歴と現状を体系的に論じたバーナード・ベイリン『アトランティック・ヒストリー』に余すところなく開陳されており、同書の邦訳は、研究代表者の和田が中心となって 2007 年に名古屋大学出版会から上梓した。存命のアメリカ史家 で最も令名が高いといえるベイリン（ハーヴァード大学名誉教授）は大西洋史国際セミナーを主催し、大西洋史の推進に精力的に携わっており、かかる書物の著者として最もふさわしい歴史家である。氏は大西洋史を「ヨーロッパ人と西半球との最初の出会いから、革命の時代までを扱う」とし、「300 年間にわたる近世大西洋世界全体の歴史」をその対象に掲げている。つまり、16 世紀から 18 世紀後半までの近世を大西洋史の主たる守備範囲と位置付けるものの、その端緒は 15 世紀末に遡り、ラテンアメリカ諸国の独立を含んだ環大西洋革命の時代、すなわち 19 世紀前半に至るまでの時代幅をカバーしている。一方、大西洋史のアプローチについては、その内容に即していくつかの分類がなされている。デイヴィッド・アーミテイジ（ハーヴァード大学教授）による分類や、後述するマーカス・レディカーによる分類などである。このように大西洋史のアプローチ、すなわちその方法論やカバーする時代・空間についてはさらなる理論的彫琢・検討が必要であり、本研究計画においてマーカス・レディカー（ピッツバーグ大学特別教授）と連絡を密にして研究の推進を考えているのも、そのためである。氏が主に研究対象とする船乗りや海賊など、これまでのナショナル・ヒストリーの枠に納まりきらなかった周縁的存在は、国境を楽々と越える大西洋史においては中心的なテーマの一つであり、その具体相は、氏の著書『海賊たちの黄金 時代――アトランティック・ヒストリーの世界』（和田光弘・小島崇・森丈夫・笠井俊和訳、ミネ ルヴァ書房、2014 年）に如実に示されている。和田はすでに前述の翻訳のほか、紀平英作・油井大 三郎編『アメリカ史研究入門』（山川出版社、2009 年）においても大西洋史の体系的な紹介をおこなっており、近世大西洋世界のカネ、すなわち貨幣の実相について論考を発表し、シンポジウム等で報告している。さらに、研究協力者として本研究計画に参加する笠井俊和（元日本学術振興会特別研究員、三重大学・人文学部・非常勤講師）は、上述の訳業において重要な役割を担うとともに、大西洋史の視点から近世の船乗りや貿易を俎上に載せて史料を分析し、それらの論考が『西洋史学』（235 号、2009 年）や『歴史の場』（ミネルヴァ書房、2010 年）に掲載・収録されるなど、新進気鋭のアメリカ史家として学界に認知されており、2012～13 年には、フルブライト 留学生としてピッツバーグ大学でレディカー氏に直接、指導を受けている。本研究計画においては、氏とのコーディネーターとしての役割を大いに発揮する予定である。

（２）メンバーそれぞれの科学研究費に基づくプロジェクト研究からは、すでに多数の論文やいくつかの著作などが研究成果としてまとめられている。とりわけ、和田光弘と久田由佳子が研究分担者として加わった共同研究「近代化プロセスにおける家族と郷土の比較文化史」の研究成果をさらに発展させるかたちで、若尾祐司・羽賀祥二編『記録と記憶の比較文化史――郷土史・史蹟・記念碑』（名古屋大学出版会、2005 年）が刊行され、そこには和田と久田が寄稿している。また、和田光弘が研究代表者となり、森脇由美子、久田由佳子が連携研究者、笠井俊和が研究協力者として参画した共同研究「近代アメリカにおける記憶・シンボル・記念碑」においては、日本アメリカ史学会・第６回（通算 34 回）年次大会（於・名古屋大学、2009 年 9 月）や、国際シンポジウム「太平洋地域における日本人の国際移動」（於・立命館大学、2009 年 10 月）［セッション２・コメンテーター］などの場で和田が成果の一端を披露し、大西洋世界の貨幣等に関して幅広く考察した研究成果報告書も刊行した。また和田は森脇・ 久田・笠井などの協力のもと、アメリカ学会・第 46 回年次大会（於・名古屋大学、2012 年 6 月）の会場校責任者として日米韓のアメリカ研究者間の交流実現に尽力した。さらに記憶や記念碑をめぐる共同研究の成果は、若尾祐司・和田光弘編『歴史の場――史跡・記念碑・記憶』（ミネルヴァ書房、2010 年）に結実し、和田、久田、笠井が寄稿している。この共同研究「近代アメリカにおける記憶・シンボル・記念碑」は、今回の研究計画のスプリングボードとなっており、そこで得られた知見をさらに発展・展開すべく、本研究の立ち上げが構想・企画された。

２．研究の目的

（１）大西洋史の考究に際しては、上記のような理論的な側面を彫琢する作業と並行して、その理論を援用して具体的な史実にアプローチする必要がある。そのためには、未開拓の史料に果敢に挑み、大西洋史の観点から学界に新たな知見を提供すべく、研究プロジェクトのメンバーはそれぞれ、研究期間内に次のような課題に取り組むことを目標とした。研究代表者の和田は、独立革命期・建国期を生きた私掠船の船長に焦点を当て、独自に入手して私蔵している同船長に関する貴重な未刊行手稿史料、数十点を俎上に載せて分析することで、彼の環大西洋的な活動の軌

跡を焙り出す。収集史料の内容は領収書、請求書、運賃明細、書簡等で、発行地もアメリカのみならず、リ バプールやハンブルクなどを含んでおり、文字通り大西洋史の実践といえる。研究分担者の森脇由美子（三重大学・人文学部・教授）は、18 世紀末から 19 世紀半ばにかけての「市場革命」の時代に、大西洋の貿易ネットワークがニューヨークの経済に果たした影響を分析する。その際、特にニューヨーク州北西部地域を大西洋岸のニューヨーク港と結んだエリー運河建設に焦点を当て、その支線、オネイダ運河に関する 80 点以上に及ぶ未刊行手稿史料（私蔵）を詳細に検討することで、港湾都市ニューヨーク市のみならず内陸部の同州北西地域の経済的社会的展開を大西洋史の枠組みから考察してゆく。研究分担者の久田由佳子（愛知県立大学・外国語学部・准教授）は、独立革命期の英国製品不買運動および、その後の本国・植民地関係を大きく変えていくことになったボストン茶会事件、さらに南北戦争までを視野に入れて、アメリカ側からだけでなく、イギリス側の史料からも明らかにする。例えば英国議会や英国東インド会社関係の史料、英国で発行された新聞等がそれにあたる。研究協力者の笠井俊和は、近世大西洋世界の貿易網の形成・維持を担った船長と水夫について社会史の観点から研究し、彼らが貿易ネットワークの形成において果たした役割を明らかにする。とりわけニューイングラ ンド船の船乗り（各船は船員が 10 人に満たない小型船）について、植民地側の裁判記録を用いつつ実態を解明し、レディカーが明らかにした大型帆船の船乗りたちの世界と対比・議論し合うことで、大小様々な船が織り成した近世大西洋という万華鏡的世界を、とりわけ「情報」の側面から浮き彫りにする。

（２）そもそも文献史料の場合、新たな知見を得ようとすれば、情報の「川」を遡って「源流」へと至る必要があるが、周知のとおり、その源流には文書館や図書館、博物館などが存在し、貴重 なコレクションとして多くの文書を収蔵している。古代・中世の文書、そして近世でも 17 世紀頃までの文書に関しては、源流に厳然と位置するのは文書館・図書館等であり、たとえ個人のコレ クションが散見されるとしても、存在自体が知られていない文書を新たに探し出すのは――むろん新たに発見・発掘される文書もあろうが――きわめて困難といえよう。しかし 18 世紀、特にその後半以降の文書に関していえば、文書館・図書館を越えて、さらに「川上」に遡ることができる。すなわち市井に埋もれている種々の文書を探し出すことができるのであり、そのなかに本研究で扱う新史料も含まれている。むろんこの時期の文書であっても、政治史・制度史関連の重要なものについては、当然ながら文書館・図書館をその居としている場合がほとんどと言ってよかろう。しかし、とりわけ社会史・経済史関連の文書の場合、家系に代々伝えられているものなど、いまだ「発掘」の余地は大きい。本研究は、その「発掘」の成果に基づく独創的な試みと言える。じっさい、すでに「発掘」した別の新史料に基づく研究成果は、和田が一部公表しており、方法論的な準備は完了している。また、大西洋史の枠組みを全面的に援用したアメリカ史研究は、いわば最先端の研究手法であり、かかるアプローチの有効性が実証されることで、諸要素の有機的連関を前提とする同様の研究を誘発する効果があるといえる。とりわけ本研究では、これまであまり使われることのなかった類の史料、なかんずく和田と森脇の研究においては、これまで文書館に収められることのなかった新史料を用いて研究を進めるため、新たな知見や史実が得られるものと期待される。そしてそれらの知見が大西洋史の視座から解釈されることで、より広い時間的・空間的な軸のなかで当該史実を位置付けることが可能になると考えられる。また、論文や著書による学術的な考究結果の公開に加えて、和田と笠井は、他の訳者とともにレディカーの著書を邦訳しており、わが国の学会のみならず、社会一般に対しても、大西洋史の具体相や魅力を紹介してゆきたいと考えている。

３．研究の方法

（１）研究代表者の和田は、大西洋史の理論的な側面からアプローチするとともに、独立革命期・建国期の私掠船船長に関わる新史料を分析対象として研究を推進する。研究分担者の森脇は、エリー運河建設計画に関わる新史料を中心に、大西洋貿易ネットワークとニューヨーク経済の関連について考究する。研究分担者の久田は、ボストン茶会事件および英国製品不買運動、また南北戦争時の米英関係等の展開等を、大西洋史の視座から再構築する。研究協力者の笠井は、近世大西洋世界の船長と水夫について社会史の観点から研究し、彼らが貿易ネットワークの形成において果たした役割を明らかにする。研究の統括は和田がおこない、関係する史料や図書を名古屋大学、三重大学、愛知県立大学に設置し、メンバーの研究者間で頻繁に研究報告や会議を重ねることで、東海地区主要国公立大学 3 校におけるアメリカ史研究のネットワークを深化させる。また、大西洋史は最新の研究スキームであるから、研究をスピーディに推進するために研究期間は 3 年間とした。

（２）初年度の平成 27 年度は、研究代表者、研究分担者、研究協力者は、それぞれの担当する研究課題を出発点として本研究のテーマにアプローチする。すなわち本研究においては、研究分担者や研究協力者らとの共同研究という機動力を最大限に生かしつつ、地域・時代ともに一層幅広い個別事例を収集・分析し、そこから得られたより広いさまざまな知見を総動員して大西洋史の視座の有効性を示してゆく。主要設備としては、関連史

資料の収集を鋭意行いたい。その上でまず、和田光弘は研究統括者として、大西洋史の諸相や史料の利用に関する諸問題を総合的に考察し、本研究の理論的支柱を打ち立てるとともに、個別の適用例として独立革命期・建国期における私掠船の船長を俎上に載せ、同船長に関する私蔵の未刊行手稿史料（領収書、請求書、運賃明細、書簡等）数十点を分類・整理した上で撮影し、史料の物理的組成（テクスチャー）の検討（料紙の法量や簀の目の向き、透かしの有無と内容、捺印の有無と内容等）と原文テクストの翻刻を行う。研究分担者の森脇は、オネイダ運河の建設に尽力した地域の名士ゼブロン・ダグラス大佐の一族に伝えられていた貴重な手稿史料（私蔵）を主たる対象として、テクスチャーと原文テクストの分析を行い、さらにエリー運河建設計画に関する同州の地方政治の実像を州議会等の原史料および文献を通して調査し、運河建設がどのようなリーダーシップによって、またどのようなプロセスで実施されたかを追っていく。研究分担者の久田は、ボストン茶会事件および英国製品ボイコット運動に関する北米植民地側からの史料（新聞記事、パンフレット等）や南北戦争時の新聞等を調査・検討する。研究協力者の笠井は、アメリカ植民地に遍在する労働者であった船乗りたちの地域社会での位置づけを明確にするため、植民地で発行された新聞を調査・検討する。その際、アメリカ植民地で発行された主要な新聞はデータベース化され、ウェブ上で公開されているため、ピッツバーグ大学において収集した膨大な量に上る同史料を分析対象として、レディカーの指導を直接受けながら研究を遂行する。

（３）平成 28 年度では、本研究のメンバーは引き続き各自のテーマに沿って研究を深化させる。和田は、大西洋史研究の最新の展開を確認しつつ、私掠船船長の史料に関して原文テクストの翻刻および翻訳を引き続き行う。森脇は、ミクロな地域社会が大西洋のネットワークとの結合によって受けた影響を、史料を用いて分析する。すなわち、ニューヨーク州マディソン郡を取り上げ、エリー運河建設に至るまでの過程を、手稿史料を含む原史料を通して検討する。久田は、イギリス側からの史料（議会資料、新聞記事等）を中心に調査・検討する。笠井は、引き続き新聞データベースに依拠して研究を進める。船の帰港や、船乗りに関連する出来事を報じた記事を抽出し分析することにより、貿易によって富をもたらす一方で、陸上では反社会的な行動も多かった船乗りが、ニューイングランドという信仰に篤いとされる地域でどのように捉えられていたのかを検証する。主要設備として関連史資料の収集を引き続き行い、遺漏のないよう努める。

（３）最終年度の平成 29 年度では、総括を意識しつつ、引き続き各自のテーマに添いつつ研究を深化させるとともに、主として名古屋大学において頻繁に会合を持ち、相互の研究成果の刷合わせを積極的におこない、最終的な成果の取りまとめにむけて議論を重ねる。和田は、史料の翻刻、翻訳の成果を基盤として、それらを総合的に分析・検討し、私掠船船長を通して見えてくる近世大西洋世界のネットワークの具体相を析出する。森脇は、運河建設がニューヨーク市に果たした役割を考察し、その上で、過去 2 年間の研究を踏まえ、大西洋のネットワークが内陸部まで浸透するプロセスを、ニューヨーク市および州内陸地域の両側から明らかにする。久田も、前年度までのアメリカ側、イギリス側双方の史料をまとめて、ボストン茶会事件や英国製品ボイコット運動等の具体相を焙り出す。笠井は、議会図書館をはじめとするアメリカ東部の文書館にて、当時の副海事裁判所記録を収集して判読を進め、この作業を通じ、主な貿易ルート別の係争の頻度や内容を分類し、船乗りがいかなる環境で貿易網を作り上げていったのかを調査する。その上で、その調査結果を前年度までの研究成果とすり合わせ、総合的な像を描き出す。また、本年度は各メンバーが上記の研究成果をもとに、東京や大阪など各地の研究会において研究報告を行い、多様な視点によるチェックを経て、より総合的な視座を得るように尽力する。また、報告書作成のための基礎資料を充実させるため、収集したデータの最終的な整理・点検を網羅的に実施する。

４．研究成果

研究代表者、研究分担者、研究協力者は、それぞれの担当する研究課題について研究を深化させるとともに、3 年間の研究の総括をおこなった。主要設備としては、引き続き名古屋大学・三重大学・愛知県立大学において関連史資料の収集を鋭意進めたが、とりわけ名古屋大学において、大西洋史およびアメリカ植民地時代初期史の研究に必須の史料集成『ヴァージニア会社文書データベース』（The Ferrar Papers, 1590-1790, form Magdalene College, Cambridge）を導入した。本データベースは本研究のみならず、今後の研究の発展・展開のための基盤、布石であり、また完全買い取りの上に本学全体で利用できるという性格とも相まって、東海地区の大学への将来的な波及効果も大いに期待できる。研究代表者の和田は、独立革命期・建国期における私掠船の船長に関する私蔵の未刊行手稿史料（領収書、請求書、運賃明細、書簡等）数十点の分類・整理・撮影、さらに当該史料の物理的組成（テクスチャー）の検討（料紙の法量や簀の目の向き、透かしの有無と内容、捺印の有無と内容等）やテクストの分析を鋭意進めた。その最新かつ総括的な成果は、本年 3 月に刊行した全 53 頁の『研究成果報告書』（以後、『報告書』）を参照されたい（『報告書』所収の「ジョン・モールトン船長関連の新史料について」、「ジョン・

モールトン船長関連新史料テクストの釈文・解説（一部）」、「史料図版」）。またその他の研究成果も含めて、単著『記録と記憶のアメリカ――モノが語る近世』（名古屋大学出版会、2016 年）を刊行した（本書に対しては、これまでに 7 本の書評が、『史学雑誌』を含む学術誌に掲載されている）。さらに事典のコラム等、その他の業績が 3 点、書評が 2 点、口頭報告等が 3 点ある。研究分担者の森脇は、オネイダ運河の建設に尽力した地域の名士ゼブロン・ダグラス大佐の一族に伝えられていた貴重な未刊行手稿史料（森脇私蔵）を主たる対象として、テクスチャーと原文テクストの分析を一層進展させた。ダグラスは上記運河の建設においてニューヨーク州政府への請願からその受注にいたるまで幅広く関与しており、当該史料は 1800 年代から 50 年代にかけて記述・作成されたダグラスの書簡その他の文書から成る 82 点の新史料であり、ニューヨークにおける交通革命の実相をたどることができる。同史料を紹介・分析した最新の成果は、上記の『報告書』に収録されている（『報告書』所収の「市場革命から見た「オネイダ湖運河文書」――予備的考察」）。さらに、著書所収の論文が 1 点ある。研究分担者の久田は、2016 年度におこなったアメリカ連邦議会図書館での調査資料、特にイギリスで発行された、親米派と見なされた新聞『ロンドン・デイリーニュース』の記事を検討し、南北戦争期における米英関係の危機を招いた「トレント」号事件に関するイギリスの動向を明らかにした。リベラルな親米派と見なされた同紙は、南部連合に対する物資提供などの中立国としての逸脱行為については問題視していた一方で、トレント号事件の国際法上の問題は看過できなかったことを明らかにした。またディケンズら、イギリス知識人のアメリカ合衆国に対する反感は、トレント号事件に由来する可能性が高かったことも示唆した（『報告書』所収の「トレント号事件に対する英国新聞の反応――『ロンドン・デイリー・ニュース』紙を中心に」を参照）。さらに著書所収の論文が 2 点、雑誌論文が 2 点、書評が 1 点、口頭報告等が 2 点ある。研究協力者の笠井は、これまで史料として多用されながらも、船乗りの歴史を語るテクストとして用いられてこなかった新聞記事を読み込み、その結果、船乗りが植民地社会における情報伝達媒体としての役割を果たしていたことを指摘した。すなわち、アメリカで報じられたニュースの多くは、民間の商船の船員（特に船長）がもたらしたものであったことを明らかにし、また、公的な郵便制度が未発達な時代ゆえに、船長らが担っていた郵便の引き受けの実態についても、新聞記事をもとに復元した。そして、その他の研究成果も含めて、単著『船乗りがつなぐ大西洋世界――英領植民地ボストンの船員と貿易の社会史』（晃洋書房、2017 年）を刊行した。さらに著書所収の論文が 1 点、翻訳等が 2 点、口頭報告等が 2 点ある。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
①久田由佳子 “Joseph Lye, a Shoemaker Diarist in Early Nineteenth Century Lynn, Massachusetts: One Aspect of New England Cod Fishery”（『愛知県立大学外国語学部紀要（地域研究・国際学編）』第 49 号、2017 年 3 月）、pp. 1-18.（査読無）
②久田由佳子「トレント号事件に対する英国新聞の反応――『ロンドン・デイリー・ニュース』紙を中心に」（『愛知県立大学外国語学部紀要（地域研究・国際学編）』第 50 号、2018 年 3 月）、pp. 131-141.（査読無）

〔学会発表〕（計７件）
①久田由佳子　第 227 回名古屋アメリカ研究会・3 月例会［書評「笠井俊和著『船乗りがつなぐ大西洋世界――英領植民地ボストンの船員と貿易の社会史』」（於・南山大学名古屋キャンパス、2018 年 3 月）
②笠井俊和　第 227 回名古屋アメリカ研究会・3 月例会［書評「笠井俊和著『船乗りがつなぐ大西洋世界――英領植民地ボストンの船員と貿易の社会史』」（於・南山大学名古屋キャンパス、2018 年 3 月）
③久田由佳子　日本アメリカ史学会・第 14 回年次大会［シンポジウム A「言論空間から見るアメリカ史」司会］（於・愛知県立大学、2017 年 9 月）
④和田光弘　アメリカ学会・第 51 回年次大会［部会 A（「『アーカイヴ』再考」）報告］（於・早稲田大学、2017 年 6 月）
⑤和田光弘　上智大学アメリカ・カナダ研究所共同研究「太平洋世界のグローバル・ヒストリー」・初期アメリカ学会 12 月例会（於・上智大学、2016 年 12 月）
⑥笠井俊和　アメリカ学会・第 50 回年次大会［自由論題 E（「初期アメリカ・国際関係・文化外交」）報告］（於・東京女子大学、2016 年 6 月）
⑦和田光弘　アメリカ学会・第 49 回年次大会［自由論題 C・司会］（於・国際基督教大学、2015 年 6 月）

〔図書〕（計９件）
①和田光弘「【コラム】記憶と記念碑」（アメリカ学会編『アメリカ文化事典』、丸善出版、2017 年）、p. 296.
②森脇由美子「アメリカにおける愛国心と共和主義」（片倉望編『愛の探究』三重大学出版会、2017 年）、pp. 15-26.
③久田由佳子「参政権なき女性の政治参加――1840 年代マサチューセッツ州における 10 時間労働運動」（遠藤泰生編『近代アメリカの公共圏と市民』東京大学出版会、2017 年）、

pp. 171-194.
④笠井俊和『船乗りがつなぐ大西洋世界――英領植民地ボストンの船員と貿易の社会史』（晃洋書房、2017 年）、総頁数 330 頁。
⑤和田光弘『記録と記憶のアメリカ――モノが語る近世』（名古屋大学出版会、2016 年）、総頁数 526 頁。
⑥久田由佳子「靴職人ジョゼフ・ライ―19 世紀初頭マサチューセッツ州リンにおける副業としての漁業」（田中きく代他編著『海のリテラシー――北大西洋海域の「海民」の世界史』創元社、2016 年）、pp. 190-212.
⑦笠井俊和「船乗りと航海譚――英領アメリカ植民地における貿易と情報伝達」（田中きく代他編著『海のリテラシー――北大西洋海域の「海民」の世界史』創元社、2016 年）、pp. 42-69.
⑧笠井俊和（共訳）イリジャ・H・グールド著（森丈夫監訳、笠井俊和他訳）『アメリカ帝国の胎動――ヨーロッパ国際秩序とアメリカ独立』（彩流社、2016 年）、pp. 121-161.
⑨笠井俊和（解説執筆）マーカス・レディカー著（上野直子訳）『奴隷船の歴史』（みすず書房、2016 年）、pp. 333-339.

〔その他〕
①和田光弘・森脇由美子・久田由佳子『アメリカ史における大西洋史の新史料に基づく実証的研究･研究成果報告書』（総頁数 53 頁、2018 年）
②和田光弘『記録と記憶のアメリカ――モノが語る近世』をめぐって」（『初期アメリカ学会ニューズレター』No. 76、2017 年）
③和田光弘「ワシントンの顔」（「月刊名大文部」第 60 号、2015 年）
④【書評】和田光弘「岡本勝著『アメリカにおけるタバコ戦争の軌跡――文化と健康をめぐる論争』」（『西洋史学』264 号、2017 年）
⑤【書評】久田由佳子「和田光弘著『記録と記憶のアメリカ――モノが語る近世』」（『アメリカ経済史研究』第 16 号、2017 年）
⑥【書評】和田光弘「宮野啓二著『南・北アメリカの比較史的研究――南・北アメリカ社会の相違の歴史的根源』」（『アメリカ経済史研究』第 15 号、2016 年）
【ホームページ等】
http://www.lit.nagoya-u.ac.jp/~seiyoshi/page_wada.html

６．研究組織

(1)研究代表者
和田 光弘（MITSUHIRO WADA）
名古屋大学大学院・人文学研究科・教授
研究者番号：10220964

(2)研究分担者
森脇 由美子（YUMIKO MORIWAKI）
三重大学・人文学部・教授
研究者番号：10314105

久田 由佳子（YUKAKO HISADA）
愛知県立大学・外国語学部・准教授
研究者番号：40300131

(4)研究協力者
笠井 俊和（TOSHIKAZU KASAI）
三重大学・人文学部・非常勤講師